

# 横浜市小児科医会ニュース



No.55 2017年11月1日

## 時 言

### — 会長就任挨拶 —

### 「こどもたちの健康で明るい未来のために」

横浜市小児科医会会長 相原雄幸  
(相原アレルギー科・小児科クリニック)

会員の皆様

この度、平成29年5月の横浜市小児科医会総会において藤原芳人前会長の後任として第7代会長に就任致しました相原雄幸(あいはらゆうこう)と申します。まだ開業医としては4年目ですが、これまでの横浜市立大学附属市民総合医療センターでの研究・臨床・教育活動や海外留学経験、神奈川県保健福祉局における行政経験を活かし、今後の横浜市小児科医会発展のために尽力してまいります。会員皆様方からのご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

今回の会長就任にあたりまして、今後の横浜市小児科医会の方向性を示すキャッチフレーズを「こどもたちの健康で明るい未来のために」と提案したいと思います。これは小児科医であれば日頃から実践し目指している内容であり会員の皆様方にもご納得いただけるものだと思います。

さて、横浜市小児科医会は平成元年に五十嵐鐵馬初代会長のご尽力により設立されました。それ以前には、横浜市内の数カ所の区あるいは地域にそれぞれ小児科医会が存在し活動していました。現在も継続して活動しています。そのような背景のもと、五十嵐鐵馬先生(在任8年)はそれらを総体として統合する形が望ましいとして、横浜市小児科医会が設立されました。その後、三澤孔明先生(第2代会長4年半)、矢崎茂義先生(第3代会長3年半)、水野恭一先生(第4代会長2年)、野崎正之先生(第5代会長2年)、藤原芳人先生(第6代会長8年)とご活躍いただき、この会は発展してまいりました。会員数は、238名となっております。また、現在は横浜市医師会のなかの各科医会の一つとして医師会ならびに横浜市の行政関連の事業などを会員の先生方のご協力を得て担っています。

会長を交替したばかりではありますが、来年はちょうど横浜市小児科医会の設立30年の節目にあたります。そこで、これを記念して30周年式典を定例総会と合わせて平成30年5月12日(土)に開催することとしました。(医会通信の欄参照)多くの会員の先生方のご参加をお願い申し上げます。

ところで、横浜市は人口約370万人の日本第2の大都市であり、こどもの人口は約50万人です。我々小児科医は、日々地域医療の担い手として病院勤務医師と他科医師などと協力しながらこどもたちの疾病治療と健康維持のために働いています。さらに、夜間・休日救急などの仕事に加えて、疾病予防、学校・保育園健診なども担当し、幅広くこどもの健康増進にも貢献しています。

近年、小児医療においては、世界標準から大きく遅れていたわが国の予防接種の対象疾患もようやく追いつきつつあります。予防接種の普及効果や小児人口の減少も相まって、重症細菌感染症患者数も減り、さらに救急受診患者数も減少傾向にあります。また、近年、医学の発展進歩は目覚ましく、それに伴い医療の質も向上してきています。我々小児科医師に求められる医療提供の内容も確実に変化してきており、アレルギー疾患や心の問題なども重要になってきています。我々医師にとって、常に新しい医学知識と情報収集が不可欠であることは言うまでもありません。横浜市小児科医会の活動がその一助になるように今後も努めてまいります。

横浜市小児科医会がこれから取り組むべき課題については、数多くあり一朝一夕では解決することが難しいものも少なくありません。その中から、歴代の会長方も取り組んでこられたものも含まれていますが、私は以下のものに重点をおいて取り組んでいきたいと考えております。

1. 小児科医師の存在意義とその認識を高めること
2. 地域医療・健康福祉の充実に貢献すること
3. 情報発信を積極的に行うこと
4. 病診、病病連携をさらに促進すること
5. 医療・保健行政などに積極的に提言などをする

最後に、これまでの横浜市小児科医会の良き伝統を引き継ぎつつ、時代に合わせた改革・変革を行うことも必要と考えております。横浜市小児科医会のさらなる発展のために、今後とも会員皆様方からのご支援とご協力・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

平成29年10月



## 最近の話題

(11)

### 横浜市の保育施策・ 保育所嘱託医について

横浜市こども青少年局  
医務担当部長

辻 本 愛 子

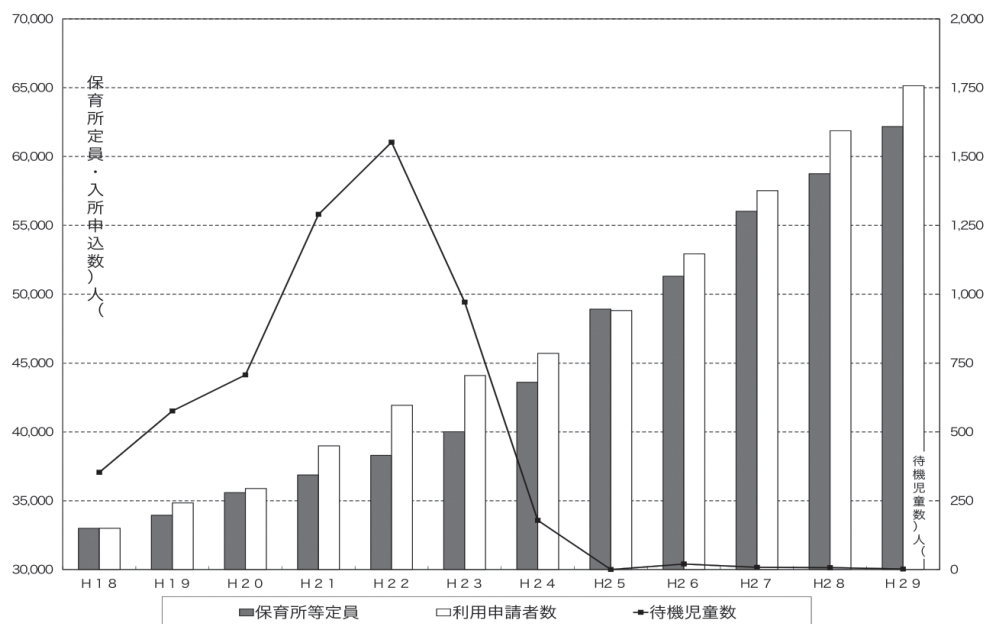
平成24年8月にこども子育て関連3法が成立し、乳幼児期の保育教育、子育て支援を総合的に進めるための新しい仕組みが誕生しました。これをうけて平成27年4月から新制度がスタートし、各市町村が計画を策定し、事業を実施することになりました。

それ以前から横浜市では「待機児童0」を目標に、市内の保育所の整備を積極的に進め

るとともに、病児保育や預かり保育などの多様な保育ニーズへの対応、保育の質の向上を目指した取り組みを行ってまいりました。平成25年にはいったん待機児童数0を達成しましたが、その後は保育利用申請者数の大幅な増加に伴い、待機児童0の達成は難しく、また保留児童数は年々増加の一途をたどっています。

平成29年4月1日現在の給付対象の保育所等施設（保育所、認定こども園、小規模保育等を含む）は市内で938か所に上り、総定員数は62181となっていますが、子ども子育て支援計画上31年度の定員は74693が見込まれており、今後も保育施設の増加が続く予定です。このような急激な施設数の増加に伴い、保育所嘱託医の先生方へのご負担が増大していると伺っており、横浜市としても重大な課題として認識しているところです。

国基準で必置が規定されている保育所嘱託医は、横浜市では以下のような役割を担っていただいております。



- ・年2回の健康診断（定期健康診断）
- ・産休明け保育実施園での健康管理
- ・保育時間中のけがや事故発生時の相談
- ・感染症発生の連絡に対する指導・助言
- ・集団保育上、配慮を要する疾病に関する管理指導
- ・入所児童の健康状態や発育・発達状態・疾病異常の有無の把握等を保育所と話し合い、助言
- ・障害児等の状況把握、助言・指導
- ・その他、健康管理、保健衛生に対する助言・指導

母親の高齢化，両親が働いている家庭の増加，家庭の孤立化等が確実に進む中，保育所での子どもたちの健康管理，発達支援，親支援はますます重要な課題になっています。慢性疾病や障害を抱える子どもや医療的ケアの必要な子どもの保育所入所も増加しており，このような子どもたちのインクルージョンを達成し，すべての子どもが安全に健康に成長できるよう支援していくことも保育施策における重要な課題です。さらに最近，子育てに行き詰っている，こどもへの配慮や対応が適切でない等，養育支援の必要な家庭が増加しており，マルトリートメント予防の観点から，区役所も積極的に保育所入所を進めているところです。様々な社会経済的問題，健康上の課題を抱える家庭について，保育所入所を通じた親支援を行うことが，こどもの心身の健全育成をめざす family-centered care の実践につながっていくのではと期待されます。

このような状況の中，保育所嘱託医の先生方の役割は益々重要なものとなっています。医療にかかわる知識や経験の乏しい保育士職員にとって，嘱託医からの指導，助言は大変貴重で，「流行している病気のことを教えてもらってよかった」，「こどもの病気のことで相談できて助かった」などの感謝の声が保育所職員から多く聞かれています。保護者向けの情報発信や資料提供などにも配慮をいただいていたりと，保育園医部会を通じた定期的な

勉強会を開催していただいたりと，手厚くご対応いただいていることを，この場を借りて心より御礼申し上げたいと存じます。

これからも保育園医の先生方との結びつきを今まで以上に強固なものにさせていただきたいと保育所は切望しており，もっと先生方から医学的助言や保健指導を受ける機会を増やしてもらいたいとの期待の声も届いています。看護職が配置される保育所も増えてまいりましたが，ひとり医療職で心細い思いをしているとの話も聞いております。保育所看護師も嘱託医の先生方からのご指導，助言を強く望んでいますので，ご高配いただければありがたく存じます。

昨年度は保育園医部会の先生方のご尽力で，「保育園医の手引き」を6年ぶりに改訂していただきました。新しい手引きはすべての公立・民間園に配布されておりますので，子どもたちの健康管理に関する保育所職員の理解向上に役立てたいと考えています。手引きを保育所と保育園医の先生方のコミュニケーションツールとしてご活用いただき，連携がさらに進むことを期待させていただきます。横浜市小児科医会の先生方には，子どもたちの豊かな未来のために，引き続き保育園へのご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



## 平成29年度横浜市小児科医会総会・研修会

日 時 平成29年 5月11日 (木)

### < 講演 1 >

### 2015年夏に千葉県で発生した日本脳炎の乳児例

講 師 地方独立行政法人 総合病院国保旭中央病院小児科 北 澤 克 彦 先生

**【はじめに】** 日本脳炎は、コガタアカイエカが媒介するウイルス性脳炎である。治療はなく予後は不良である（死亡20%～、後遺症40%～）。1992年以降国内発生は年間10例以下で推移しているが、2015年8月、当科では重度の後遺症を残した日本脳炎の乳児例を経験した。その後、2016年3月に日本小児科学会は、ハイリスク小児に対しては生後6か月からの（標準接種年齢は3歳）ワクチン接種を推奨する声明を発表した。自験例を提示した上で、日本脳炎の罹患リスク、ワクチン接種の問題点などについて考察した。

**【症例】** 著患のない10か月男児。自宅周囲には水田が広がり、近くに食肉工場（豚）があった。3日前からの発熱、当日朝からの傾眠、左共同偏視を主訴に入院した。入院時、体温38.6℃、呼吸循環に異常なく、髄膜刺激徴候はなかったが、右側優位の四肢麻痺、四肢の腱反射亢進、病的反射を認めた。両側下腿に多数の蚊刺痕を認めた。血液検査に異常はなかった。髄液細胞数は43/ $\mu$ L（単核球93%）と増加していた。頭部CT上、異常所見は明らかではなかったが、MRI（拡散強調画像）では、両側視床に局限した高信号域を認めた。脳波では、全般性高振幅徐波を認めた。ウイルス性脳炎の疑いとして、アシクロビル、抗

けいれん薬、セフトリアキソンを開始した。しかし、神経症状の増悪傾向がみられたため、マンニトール、メチルプレドニゾロンパルス療法を追加した。その後、解熱は得られたものの神経学的回復の徴候は乏しかった。入院10日目よりリハビリを開始していたが、入院22日目、入院時の髄液から日本脳炎ウイルスRNAが検出された（RT-PCR法）との報告があり日本脳炎と診断した。日本脳炎HI抗体価は、入院時10倍、第11病日80倍、第79病日160倍と上昇していた。入院3か月後、重度の痙性四肢麻痺を残した状態でリハビリ専門施設に転院した。

**【考察】** (1)症例の振り返り：当初日本脳炎は鑑別診断になかったが、県衛生研究所に髄液のウイルス学的検査を依頼したことで確定診断された。頭部MRIで認められた両側視床病変は早期診断の手がかりになる可能性が示唆された。(2)罹患リスクの評価：当地域は稲作と養豚が盛んであるが、水田（コガタアカイエカの生息地）と養豚ファーム（ブタは日本脳炎ウイルスの増幅動物）が近接して存在する地区もありハイリスク地域である。2015年夏、千葉県のブタの日本脳炎抗体保有率は80%にまで上昇していた。(3)ワクチン接種：日本脳炎は vaccine preventable disease で



ある。当診療圏では、医師会、自治体の連携のもと2016年8月より生後6か月からの日本脳炎ワクチン接種を推進する活動を開始して

いる。しかし、供給が不十分なため、本来接種すべき3歳児用ワクチンが不足するという新たな問題が発生している。

## < 講演 2 >

# 「インフルエンザ重症化対策—肺炎、脳症、新型インフルエンザの対応を含めて」

講 師 東京医科大学 小児科 河 島 尚 志 先生

インフルエンザが重症化した際の疾患群として、重症肺炎、急性脳炎／脳症、心筋炎が代表であり、これら3疾患が主な死因となる。

インフルエンザA (H1N1) pdm09の際の急性肺炎の死亡症例の検討では、肺胞障害が小葉単位でおこって呼吸障害にて死亡しており、病変は気道より肺胞で著明であった。H1N1pdm09は鳥型 $\alpha$ 2-3GALシアル酸(肺胞に存在)にウイルスが結合するため、主にII型肺胞細胞で増殖している。一部の小児死亡例は肺炎の所見なく脳症後の肺水腫と推察されている。こういったウイルス学的性状による肺胞での感染のため経過が早く、呼吸管理は迅速性を要求され、重篤例ではECMO(体外式模型人工肺)が有効である。また、基礎疾患として気管支喘息があることが多かった。

インフルエンザ脳症は急性脳症の原因の中でも最多の原因である。ウイルスと宿主とのinteractionによるもので重症化している。しかし、ウイルス学的に脳症すべてに共通する遺伝子はみつかっていない。インフルエンザは他のウイルスに比べ、髄液中のサイトカイン上昇が特に著明である。急性脳症の病態は、heterogeneousなもので、代謝異常が最低でも5%が混じっている。病態にからむと考えられる polymorphism や遺伝子変異も一部の症例で報告されてきている。種々のタイ

プが確認され、高サイトカイン血症が主体である患者もいる。診断上では迅速キットによるものは格段に進歩したが、脳症の診断には現状では臨床症状によるものが一番で、画像、髄液所見、脳波などはいまだ補助的である。病態面では多くのバイオマーカーが検討され、これらの因子の2面性が病態にかかわっている。proinflammatory cytokineだけでなく、各種のケモカインやフリーラジカルも上昇、ミトコンドリアの障害も併発している。granzymeの上昇も一部の患者では上昇し、アポトーシスも関与している。さらに予後不良例で、神経栄養因子や血管由来因子が上昇し、最終的な予後を規定している病態ではneurovascular unitとしての神経障害が推察される。

また、抗ウイルス薬の耐性化は大きな問題であるが、現状では耐性ウイルスのpandemicは起きていない。特に、H7N9は致死率が高く、オセルタミビルに対する感受性が低いうえ、増殖部位によっては迅速キットによる早期診断が困難である。今のところ感染源のほとんどが、家禽との接触のある患者であるが、ヒトヒト感染力が強い変異に注意が必要である。この際に迅速キットが有効でない可能性もある。

# 第42回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会

日 時：平成29年6月9日（金）

< 講演 1 >

## 「乳児血管腫の新治療」

講 師 神奈川県立こども医療センター 皮膚科 馬 場 直 子 先生

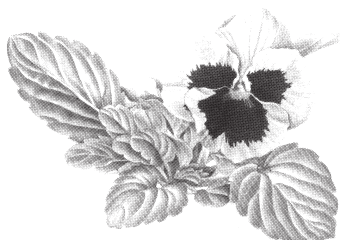
小児専門病院の皮膚科を初診する疾患で、最近最も多いのは母斑・血管腫である。実際に母斑や血管腫を持って生まれてくる子どもの割合が増えているわけではないが、乳幼児期早期に治療したいという需要が高まっていることを反映していると思われる。

その中で、従来 wait & see で良いとされてきた乳児血管腫の治療において、大きな変革がもたらされた。βブロッカーであるプロプラノロールが乳児血管腫の退縮効果をもたらすことが、2008年偶然に発見されたことを契機に、欧米では本剤が重症乳児血管腫に対する第一選択として用いられるようになったからである。わが国では、インデラル錠を粉碎して適用外使用してきたが、2014年に国内でも多施設共同第Ⅲ相臨床試験が行われ、有用性と安全性が確かめられた後、2016年ヘマンジオールRシロップが乳児血管腫に対して保険承認が下り発売されるに至った。

プロプラノロールの乳児血管腫への作用機序は明確には分かっていないが、血管腫の血管内皮細胞には、β1、β2アドレナリン受容体が存在しており、そこにアンタゴニストと

して作用することにより、血管収縮作用、血管新生促進因子（血管内皮増殖因子、線維芽細胞増殖因子など）の発現抑制作用、血管内皮細胞のアポトーシス誘導作用などによると考えられている。

増殖期の乳児血管腫で、眼裂、鼻腔、口腔、外耳道の狭小化などの機能的問題や、顔面の巨大例などの整容的問題がある場合、潰瘍形成があり易出血性がある場合などに、生後1～5ヵ月から内服開始させると、非常に有用な治療法である。内服期間は6ヵ月～1年間くらい必要と考えている。本剤は非選択的βブロッカーであるため、循環器系、呼吸器系、糖代謝系、中枢神経系などへの様々な副作用の懸念もあるため、安易に使うことなく、リスク・ベネフィットをよく検討し適応を厳選した上で、バイタルチェックをこまめに行いながら慎重に投薬し、長期経過観察を行っていくことが大前提となる。どのような血管腫に使用するべきなのかの適応と、治療の実際について、当科での経験を供覧させていただいた。



## < 講演 2 >

# 小児・産婦人科医に必要な蕁麻疹診療の行動指針

講 師 広島大学 医歯薬保健学研究所 皮膚科学 秀 道 広 先生

突然現れ、数時間～1日以内に消え去る皮疹はほとんどすべて蕁麻疹と考えて良く、同様の反応が粘膜に現れるものを特に血管性浮腫と呼ぶ。蕁麻疹の治療の基本は、原因・悪化因子の除去・回避と薬物療法で、その内容は重症度よりもむしろ病型により規定される。蕁麻疹で最も多い病型は、毎日自発的に皮疹が現れることを特徴とする特発性の蕁麻疹で、この病型は各種薬剤に対する反応性が高い。一方、特定の刺激により皮疹が誘発されるものにはアレルギー性蕁麻疹、物理性蕁麻疹、コリン性蕁麻疹などが含まれ、これらの病型では皮疹を誘発する特異的刺激を除去、回避することが大切である。

蕁麻疹の中でアレルギーが原因となる例は稀であるが、症状出現が特定の場所や動作と関連している場合はI型アレルギーの関与を疑い、精査する意義がある。講演では、セフェム系抗生剤に対する接触蕁麻疹、バナエイエビ特異的なアレルギーの例などを紹介した。また、血管性浮腫では、遺伝性血管性浮腫、

コリン性蕁麻疹によるものなどがあり、前者ではC4とC1インヒビターの低下、後者では汗アレルギーの存在が診断に役立つ。

特発性の蕁麻疹では、非鎮静性の第2世代抗ヒスタミン薬を基本とし、通常量の抗ヒスタミン薬で十分な効果が得られない場合は薬剤の変更、追加または増量が推奨される。第2ステップとして抗ロイコトリエン薬、ヒスタミンH<sub>2</sub>拮抗薬などの補助的治療薬、第3ステップとして少量の副腎皮質ステロイドが位置づけられるが、特に小児では副作用の点でステロイドの長期投与を行うべきでない。

特発性の蕁麻疹では、マスト細胞の脱顆粒の背景には何らかの炎症状態があると予想されるが、我々は血液凝固能の亢進に着目し、ヒスタミンが凝固系を駆動し得ることを見いだしている。

発症後1ヵ月以上経過した蕁麻疹はその後も長く続くことが多く、今ある症状の消失、緩和とともに中長期的な病勢軽減の視点が大切である。





横浜市小児科医会会長

相原 雄 幸

1. 報告

1) 総会 平成29年5月11日(水)  
横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

- ・平成28年度決算ならびに平成29年度予算承認
- ・平成29年度事業計画承認
- ・役員人事承認 会長・副会長・常任幹事交替など

2) 講演会開催

a. 平成29年度春

横浜市小児科医会研修会  
平成29年5月11日(水)  
横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ5階「日輪」参加者99名

講演 1

国保旭中央病院小児総合診療部長  
北澤 克彦 先生  
2015年夏に千葉県で発生した日本脳炎の乳児例  
・温暖化の影響と養豚場近郊などでは日本脳炎感染リスクは少なくなかったことを実感しました。ハイリスクの場合は3歳未満の予防接種も積極的に行うことも必要であることを再認識した貴重な症例報告でした。やはり予後は良くなかった。

講演 2

東京医科大学病院小児科教授  
河島 尚志 先生  
インフルエンザ重症化と対策  
ー肺炎・脳症を中心にー  
・インフルエンザ重症化について肺炎と脳症の診断と治療法について解説していただきました。以前に比べると治療法も改善してきているもののまだ十分とは言えませ

ん。脳症の一部の症例では代謝異常も含まれていることも明らかにされてきました。また、今後想定される新型インフルエンザのパンデミックについては対策が十分とはいえ不安があります。新型インフルでは耐性ウイルスが蔓延しないことを祈るばかりです。現状の季節性インフルエンザでもワクチン接種と抗インフルエンザ薬の使用を積極的に行うことが重症化の防止のために出来ることです。

b. 第42回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会平成29年6月9日(金)  
ホテル横浜キャメロットジャパン4階「フェアウインドウⅡ・Ⅲ」参加者99名

講演 1

県立こども医療センター皮膚科部長  
馬場 直子 先生  
乳児血管腫の新治療

- ・乳児の血管腫の新しい治療法特にレーザー治療と新たな治療薬の効果について症例を提示していただきながらその有効性について解説いただきました。以前には経過観察しかなかった疾患もきれいになることがよく分かりました。早期の治療開始が望ましいとのことで、早めに馬場先生にご紹介することが最善のようです。

講演 2

広島大学大学院医歯薬保健学研究院  
統合健康科学部門

皮膚科学教授 秀 道広 先生  
小児・産婦人科医に必要な蕁麻疹診療の行動指針

- ・蕁麻疹の診療ガイドラインを編纂された秀先生からその機序と治療について解説していただきました。蕁麻疹は小児においてもありふれた病気ですが、原因が特定出来ないことも少なくないこと、慢

性蕁麻疹では、積極的に長期間の治療が必要であること、薬物使用方法などの解説がありました。日常診療にすぐに役立つ内容でした。

### 3) 平成29年度第2回常任幹事会

平成29年7月5日(水) 13名参加

・新たなプロジェクトの立ち上げと各種委員会再編

- a. 広報委員会(大川常任幹事)
- b. 救急医療委員会(吉田常任幹事)
- c. 学術委員会(相原会長)
- d. 公衆衛生保健委員会(田口副会長)
- e. ホームページ作成プロジェクト(中野副会長)
- f. 30周年式典準備会(大山副会長)

・幹事増員・勤務医会員創設について  
病診連携の促進のために横浜市内基幹病院からそれぞれ幹事に入っていた。また、病院勤務医の入会を促進するために勤務医会員制度を創設することなどが提案され了承された。

・その他、横浜市医師会その他各種部会委員の推薦

### 2. 30周年記念式典開催予告

巻頭の挨拶でも記載しましたが、来年は小児科医会設立30周年に当たりますので定例総会に合わせて30周年記念式典を開催することとしました。

日時：平成30年5月12日(土) 16時から

場所：新横浜プリンスホテル

次第：・定例総会

・記念式典・来賓挨拶・表彰

・記念講演

1. 横浜市大 伊藤 秀一教授  
「学校検尿～わが国発の画期的健診制度の有効性と意義～」
2. 千葉大学 下条 直樹教授  
「食物アレルギーの治療と予防～最近のトピックス～(仮)」

・懇親会

・定例総会はこれまで平日に開催

してきましたが、今回は30周年記念式典を同時に実施するために土曜日に開催することにしました。日程を予め押さえていただければと思います。多くの会員の皆様のご参加により会を盛り上げていただければと思っております。

最後に

1. ホームページの立ち上げについては中野副会長を中心に検討が行われ、横浜市医師会ホームページ内の現在の小児科医会のページを大幅に拡充充実する方向で検討を進めています。今年度内には新たなホームページ開設の予定です、予算をあまりかけずに継続性がたもたれることを優先しました。ご期待ください。

2. 小児科医会の充実のためには若手会員の増加が必須です。新規開業された先生や地区小児科医会には所属されていても市小児科医会に所属されていない先生もいらっしゃると思います。積極的に勧誘をお願いしたいと思います。医師会会員であることは必須ではありません。宜しくお願いいたします。



## 区会だより

### 青葉区小児科医会

青葉区医師会小児科医会には4月に3名の入会と、8月にご逝去による退会1名により、現在26名の小児科医師が所属しています。今回は上半期の主な活動報告をいたします。

#### 1) 青葉区医師会学術講演会 (小児科医会合同)

平成29年5月10日 於青葉区医師会館  
演題『予防接種 up to date ～今後定期接種化が期待されるワクチンの現状と課題～』

演者 すがやこどもクリニック  
菅谷 明則 先生

菅谷先生は「NPO法人VPDを知って、子どもを守ろうの会」の理事として、小児のワクチン行政にも深く関わりをもつ先生です。この数年日本の小児ワクチン行政は劇的に変化し、ワクチンギャップも相当に解消されましたが、ワクチンの普及による実情と、おたふくかぜワクチンやロタワクチンなど残されたワクチンなど今後の課題などに関して、詳しくわかりやすいご解説をしていただきました。

#### 2) 第31回藤が丘小児科クラブ症例検討会 (青葉区小児科医会共催)

平成29年7月19日  
於昭和大学藤が丘病院C棟会議室  
症例検討会

1. 「レミケードが効果なく血漿交換を施行した重症川崎病の1例」  
昭和大学藤が丘病院小児科  
青木 真史 先生
2. 「積極的な $\gamma$ -グロブリン大量療法を考慮すべきであった川崎病の1男児例」  
昭和大学藤が丘病院小児科  
石井 遥子 先生

#### 3. 「熱性痙攣を主訴に来院した侵襲性肺炎球菌感染症5例」

昭和大学藤が丘病院小児科  
高瀬 真理子 先生

講演会の後は「青蓮藤が丘店」で、藤が丘病院小児科の先生方と、開業医の先生方とで和気藹々とした雰囲気での納涼会が行われました。

#### 3) 青葉区福祉保健センター主催の講演会

平成29年7月13日  
於青葉区福祉保健センター  
「乳児の保護者に対する講話」  
長濱医院 長濱 隆史 先生

平成29年8月30日  
於青葉区福祉保健センター  
「小児救急講座」  
はやし小児科医院 林 智靖 先生

#### 4) 乳幼児健康診査等に関する懇話会

平成29年8月14日  
於青葉区健康福祉センターこども家庭支援課会議室  
保健センターと小児科医会との会合を11年ぶりに再開し、青葉区での小児医療への取り組みの現状報告（こども家庭支援課）と、健診出勤の実情などの話し合いを行いました。

#### 5) 平成29年度下半期の乳幼児健診医師派遣日程表の作成

平成29年8月22日  
於青葉区医師会会議室

(文責 阿座上 志郎)

## 南部小児科医会

横浜市南部小児科医会の平成29年度上半期の事業内容をご報告します。

### ●定例幹事会

4月26日（水）

於 上大岡 花里（当番幹事 宇南山）

### ●平成29年度定例総会，講演会

6月14日（水）午後7時～

会場：済生会横浜市南部病院（4階会議室）

共催：塩野義製薬株式会社

定例総会

事業報告 会計報告 会計監査報告

その他

特別講演

座長 田中 文子 先生

（済生会横浜市南部病院小児科部長）

講師 三保 仁 先生

（三保耳鼻咽喉科院長）

演題 当院におけるSLIT（舌下免疫療法）の進め方

### ●第28回南部病院小児科地域連携集談会

7月26日（水）

於 済生会横浜市南部病院（4階会議室）

共催：Meiji Seikaファルマ株式会社

①百日咳で入院加療を必要とした2症例の検討 境 里彩 先生

②学校給食でアナフィラキシーをきたした6歳女児 中澤 枝里子 先生

③学校健診をきっかけに診断されたFanconi 貧血の13歳男児  
大砂 光正 先生

④磁石誤飲による消化器穿孔をきたした1歳男児 秋山 佳那子 先生

（文責 森 哲夫）

## 東部小児科医会

平成29年度前半の主な活動を報告します。

### (1) 平成29年5月17日

第103回東部小児科医会講演会・総会

19：15～総会，19：30～講演会

講演1：『特徴的所見から過食及び肥満を呈する前に診断されたPrader-Willi症候群の1歳男児例  
済生会横浜市東部病院 小児科

富樫 勇人 先生

講演2：『小児肥満における脂肪肝の長期予後』

済生会横浜市東部病院小児肝臓  
消化器科部長

乾 あやの 先生

特別講演：『小児肥満症・メタボリック  
シンドロームの診断と治療』

東京家政学院大学健康栄養学科  
原 光彦 先生

会場：済生会横浜市東部病院

### (2) 平成29年7月13日

第11回横浜市東部小児連携の会

第104回横浜市東部小児科医会

（共催 横浜市東部小児科医会・鶴見区  
医師会・済生会横浜市東部病院）

東部病院症例検討会

演題1：ビタミンB6療法が著効した症  
候性West症候群の1例

演者：済生会横浜市東部病院

小児科 中野 晃太郎先生

演題2：ITP加療中にPRESを発症した  
一例

演者：済生会横浜市東部病院

小児科 大坪 みさき先生

演題3：脳炎を合併した川崎病の1例

演者：済生会横浜市東部病院

小児科 富樫 勇人先生

演題4：関節症状を呈さずCRP高値が遷延した関節炎合併川崎病の1例

演者：済生会横浜市東部病院  
小児科 灘 大志先生

会場：済生会横浜市東部病院

103回講演会では、東京家政学院大学 健康栄養学科 原 光彦先生に小児肥満症の診断治療についてご講演いただきました。肥満症が小児科でも脂肪肝や動脈硬化などの身体的問題をおこすだけでなく、いじめや不登校などの心理的問題や運動器機能障害にもつながることや、小児肥満症の診断基準・専門医への紹介の目安などをわかりやすくお話しいただきました。

(文責 川端 清)

## 南西部小児科医会

学術講演会 1 回，研究会 2 回を開催しました。

「横浜市南西部小児科医会学術講演会」

日時：平成29年 7 月 6 日19時15分

会場：HOTEL PLUMM 2 階  
Palais Royal

演者：みなと赤十字病院アレルギーセンター

小児科副部長 磯崎 淳 先生

演題：乳幼児のアトピー性皮膚炎

～経皮感作とスキンケアの実際～

「第46回戸塚区小児疾患研究会」

日時：平成29年 3 月17日19時30分

会場：横浜医療センター 2 階大会議室

一般演題：

座長 横浜医療センター

鏑木 陽一 先生

1. びまん性多発肺結節陰影を伴った川崎病の一例
2. 頻拍発作を契機にBasedow病 WPW症候群と診断された一例
3. 在宅治療に移行できた自宅分娩での重症新生児仮死の一例

レクチャー：

1. 在宅治療移行の現状

横浜医療センター 福山 綾子 先生

2. 食物アレルギー診断ガイドライン

2016の改定点を中心に

横浜医療センター 宮沢 啓貴 先生

「第47回戸塚区小児疾患研究会」

日時：平成29年 7 月14日19時30分

会場：横浜医療センター 2 階大会議室

一般演題：

座長 横浜医療センター

塩谷 裕美 先生

1. 川崎病回復期に関節炎を合併した一例
2. 孤発例が疑われる色素失調症の一例
3. けいれん重積型（二相性）急性脳症の一例

レクチャー：

座長 横浜医療センター

小林 慈典 先生

乳幼児の上咽頭に定着する肺炎球菌の血清型・ペニシリン耐性率の推移

横浜医療センター 矢内 貴憲 先生

＜今後の活動について＞

「学術講演会」は、今後は不定期となりますが皆様の関心の高い内容で開催を予定しています。近年参加者が少なく残念です。是非多くの皆様のご出席をお願いします。

「戸塚区小児疾患研究会」は横浜医療センターの先生方の御好意により主に症例報告・解説をいただいております。貴重な病診連携の場として平成16年から続く伝統ある研修会です。今後は諸藩の事情により年 2 回の開催を予定しています。また日本小児科学会専門医研修単位は取得できませんが、引き続き日本医師会生涯教育講座，更に日本小児科医会発行の地域総合小児医療認定医の単位を交付する予定です。今後ともよろしく願いいたします。

(文責 小泉 友喜彦)



## 西部小児科医会

平成29年度上半期の活動を報告いたします。

横浜市立市民病院小児科医師による症例検討会が行われました。

日時：平成29年6月21日（水）

会場：保土ヶ谷区医師会2階会議室

演題

- (1) けいれん発作を契機に診断に至った偽性副甲状腺機能低下症の10歳男子  
山下 修平 先生
- (2) 保存的に治療し得た上腸間膜動脈症候群の10歳女子  
鑑 涼介先生
- (3) 侵襲性肺炎球菌性感染症の1例  
田村 雅人 先生
- (4) 新生児多発性脳こうそくの1例  
坂口 朝美 先生
- (5) 拠点病院小児科としての横浜市立市民病院～症例から学んだこと  
山下 行雄 先生

活発な討論がなされました。自由に発言ができますので、参加者が増えることを切望します。

（文責：尾崎 亮）

## 都筑区小児科医会

都筑区小児科医会と昭和大学横浜市北部病院との連携勉強会および港北循環器カンファレンスは下記のように開催されました。

第48回「都筑区小児科医会と昭和大学横浜市北部病院との連携勉強会」（小児科連携勉強会）

期日：2017年（平成29年）5月12日（金）

午後7時30分～

会場：昭和大学横浜市北部病院中央棟  
9階大会議室

症例発表「最近経験した人工呼吸管理を

有した百日咳2例」

昭和大学横浜市北部病院こどもセンター

曾我 恭司 先生

特別講演『小児感染症の

“HOT TOPICS”』

東京都立小児総合医療センター

堀越 裕歩 先生

第21回港北小児循環器カンファレンス

日時：2017年11月10日（金）

19：00～21：00

会場：昭和大学横浜市北部病院西棟

4階講堂

一般演題：

演題1 「母体シェーグレン症候群による先天性完全房室ブロックの1例」

昭和大学横浜市北部病院循環器センター

浅田 大 先生

演題2 「気道症状を契機に診断されたvascular ring」

昭和大学横浜市北部病院

こどもセンター

曾我 恭司 先生

教育講演：

「循環器疾患の保険審査、先天性心疾患と心血管外科」

菊名記念病院 小児科

村田 升 先生

特別講演：

演題：「日常診療に潜む小児の2次性QT延長症候群」

済生会横浜市東部病院

こどもセンター

岩本 眞理 先生

以上です。

また、月1回語学研修会も実施しています。毎回、5～8人ほど出席し、英語の勉強をしています。

（文責：百々 秀心）

## ＝ 庶 務 報 告 ＝

### 1. 平成29年度総会及び研修会

H29. 5. 11 (木)

会場：横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ  
5 F 「日輪」

出席者：99名

#### (1) 総 会

1. 会長挨拶
2. 議長選出
3. 議事

- 1) 平成28年度事業報告
- 2) 平成28年度決算報告
- 3) 平成29年度事業計画 (案)
- 4) 平成29年度予算 (案)
- 5) 平成29・30年度医会会長及び常任幹事
- 6) その他

#### (2) 研 修 会

##### 講演 1

演題 『2015年夏に千葉県で発生した日本脳炎の乳児例』

講師 北澤 克彦 先生

(地方独立行政法人総合病院国保旭中央病院 小児総合診療部長)

##### 講演 2

演題 『インフルエンザ重症化と対策  
－肺炎・脳症を中心に－』

講師 河島 尚志 先生

(東京医科大学病院 小児科学主任教授)

### 2. 常任幹事会

第1回 H29. 4. 19 (水)

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：15名

第2回 H29. 7. 5 (水)

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：12名

### 3. 打合せ

☆ホームページ制作打合せ H29. 8. 1 (水)

於 横浜市医師会会議室

出席者：5名

### 4. 第42回産婦人科・小児科研究会

H29. 6. 9 (金)

於 ホテル横浜キャメロットジャパン 4 F  
「フェアウィンドウⅡ・Ⅲ」

出席者：99名 (小児科：70名、産婦人科：29名)

講演① 演題 『乳児血管腫の新治療』

講師 馬場 直子 先生

(地方独立行政法人神奈川県立病院  
機構神奈川県立こども医療セン  
ター皮膚科部長)

講演② 演題 『小児・産婦人科医に必要な  
蕁麻疹診療の行動指針』

講師 秀 道広 先生

(広島大学大学院医歯薬保健学研究  
院統合健康科学部門皮膚科学教授)

### 5. 広報活動

H29. 4. 1 (土)

小児科医会ニュース (第54号) の発行

(文責 大山 学)

## ＝ 会 計 報 告 (中 間) ＝

横浜市小児科医会会計の中間報告を申し上げます。

中間報告 H29. 9. 30現在

現在高	1,901,101円
(内訳) 現金	0円
郵便貯金	434,674円
医師信用組合	1,466,427円

(会計 池部 敏市)

## 会員動向（平成29年4月～平成29年9月）

## 編集後記

### 入会 2名

〒236-0051 金沢区富岡東2-6-70（自宅） わかば子供クリニック（川崎市中原区） TEL 044-771-1752 宮 沢 啓 貴
〒244-0801 戸塚区品濃町535-2 ゆかチルドレンクリニック TEL 045-526-2225 佐々木 由 佳

### 退会 4名

区 名	氏 名	備 考
港 北 区	南 澤 康 雄	H28. 9. 25 逝去
金 沢 区	大 倉 雄四郎	
金 沢 区	富 田 章	
緑 区	皆 川 邦 子	

### 異動 0名

会員数：238名（平成29年9月30日現在）

この度、藤原芳人先生の後任として相原雄幸先生が横浜市小児科医会の会長に就任された。

大学、一般病院、行政、開業医とさまざまな経験を積まれている相原先生のフレキシブルでフレッシュな横浜市小児科医会運営が期待される。

私は、かつて存在した「横浜市愛児センター」という横浜市立の産院で、相原先生と御一緒に働き苦楽を共にした仲である。

「何でも言わせてもらおう」つもりでおりますのでよろしくお願い致します。

（広報担当常任幹事 大川 尚美）



2017年11月1日発行  
横浜市小児科医会ニュース No. 55  
題字 五十嵐鐵馬  
発行人 横浜市小児科医会  
代表 相原 雄幸  
編集：横浜市小児科医会広報部  
事務局：〒231-0062  
横浜市中区桜木町1-1  
横浜市医師会 地域医療課  
Tel 201-7363